せたかむい
発行・古平町史編纂室
古平町文化会館☎42-2590
第134号・平成12年11月1日

年表で読む古平の歴史

《41》

鰊漁以外の漁業
――鮭　漁――

■アイヌの人たちと鮭

まだ蝦夷地と呼ばれていたころ、アイヌの人たちの主な食料は鹿や鮭だといわれ、鮭が産卵でのぼる川筋に村が多くできました。海で鮭を獲るための舟や漁具を持っていませんから、もっぱら川にのぼって来る鮭を獲り貯蔵もしていました。それで鮭を最も大事な食料として神様扱いをし、カムイチェップ（神の魚）と呼んでいました。

伝説の中にも鮭に関するものが大変多く、それに伴っていろいろな行事もありました。しかし鮭を獲る方法や、その祭りごとなどはその土地でかなり違っていたようです。

古平での様子などはわかっていませんが、古平川・チョペタン川・歌棄川・沖村川の付近では、昔、アイヌの人たちが使った石器や土器が見つかっています。

これらの川では、マレックと呼ばれる銛（もり）で獲り、頭と中骨を除いたものを四枚に割いて囲炉裏（いろり）の上に吊し、くん製にして貯蔵したり、和人との交易（物々交換）に使われました。

■岡田家の記録から

運上家の岡田家の記録によると、ハマナカ（浜町）・メメタレ（港町）・ヲタスチ（歌棄）の小使（アイヌの人たちの中の役付きの人）に清酒の小さい樽を与えて鮭を獲らせ、それを交易品としていた、とあります。

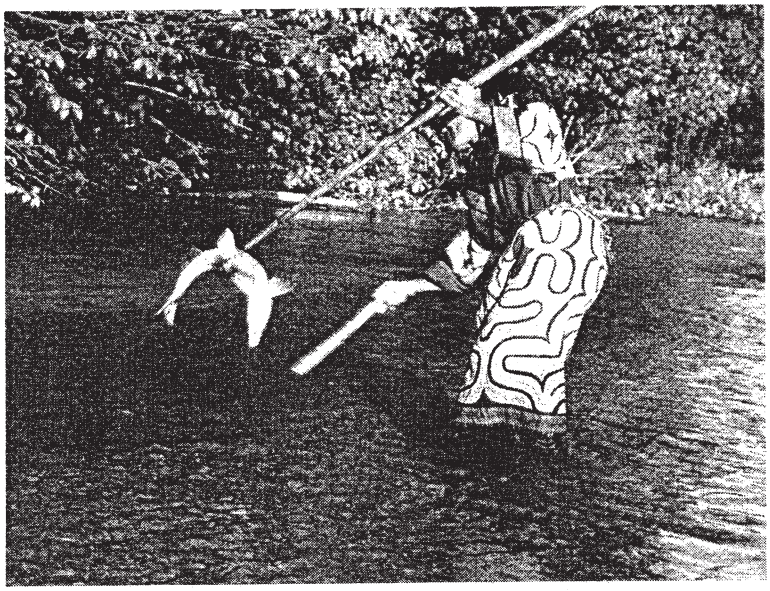
また、秋の彼岸のころ鮭網を建てたときにも、清酒や濁酒（どぶろく）を与えています。この当時の網は、引き網か刺網だったと考えられます。初猟があるとオムシャといって、主だった者を呼んで清酒を与え、ほかの者にも清酒や濁酒を与えていました。

水揚げした鮭の六割は運上家に納め、四割がアイヌの人たちの取り分になりますが、これは交易品として次のような割合で交換されました。

※鮭白毛四束か鮭黒毛五束＝米八升か清酒四升

鮭五本＝清酒一盃

※　鮭白毛は海で獲ったもの、黒毛は川で獲って色のついたものと考えられる。鮭一束は二十本。酒一盃は約二・五合。



■秋味場所

天明二年（一七八二）、古平場所の知行主であった新井田喜内と恵比須屋久次郎が、鮭の取り引きを天明六年まで契約をしたというのが、鮭についての初めての記録です。

大正七年

1／22　十二月から一月にかけてずい分ひどかった。タラ釣りなどは一月に入って二回ぐらいしか出漁していない。

1／26　久しぶりに出たカレ網が大漁で、浜は景気が良い。

1／30　寒さは厳しいがナギ続きで、カレ網も生送りが値段よくみんな喜んでいる。

2／1　農会の総会があったが近来にないほどの出席者、技術者の雇い入れの件は可決した、月給三十四円、三時からビヤホールで火防組合の総会がある。

2／4　朝五時ころから客がある、群来村、美国方面からの客が多い。刺網の現金売り千四百間で百四十円、貸し売り八百間、合計二千二百間売れた。

2／7　このごろリンゴも暴騰していて、あちこちから問い合わせが来る。夜、土谷座へ歌舞伎見物に四人で行く。

2／8　この頃は朝夕で二時間は日が長くなったようだ、小春日和のような天気だ、店も二人でやっているがなかなか忙しい。

2／11　紀元節の式に出席する、その後、学芸会があるというので、三十分ほど待つ、児童千三百人、来賓などで広い運動場も満員だ、二時半ころ終わる。二時からビヤホールで農友会の懇親会があり、二十余人が出席する。

2／21　禅源寺の花廻りがあるというので子どもたちも出かけた。今が一年中で網の最も出るころだ。

2／17　雪がちらちら降っているが寒いこと、硯の水も凍っている、こたつに入っていても顔や手が冷たい。

2／21　小樽から汽車で十時ころ余市に着く、甲谷の船に乗るつもりでいたが船が来ないので待っていたら、浜町へ帰る二人が陸行するというので、いっしょに陸行することにした、天気も良く、三人連れでいろいろ話をしながら歩いた、山道も割りと楽だった、六時ころ家に着いた。

2／23　昨日からの吹雪も晴れ静かになった、今八反田では昨日漁夫が来たとかで、町を歩いている、いよいよ鰊漁期になって来た、これで町も景気づくだろう。

2／27　今日は雨降りとなった、建網の漁夫も増え、町中に活気がある、営業税の調査に来た、届け出より少し増えて九千円になった。

2／28　刺網の売上は一年毎に多くなった、昨年九月に仕入れてから綿糸類が暴騰し、二百七十円で仕入れたものが三百五十円もしている、ちょうどよい時に仕入れ、こんなことはめったにない、天祐と喜ばねばならない、本年は十万間の売れ行きである。

3／3　今日は古平座で、浜町芸者連のカブキ芝居があるというので、芸者が客ソリ三台に分乗して町廻りをする、なかなか賑やかなものだ。

3／4　建網の問い合わせもあるが、売れ行きの見込みがつかないので困る、今年のように暴騰すると、持ち越しにでもなったら利益どころではなくなってしまう、網針、ボイル油も毎日出る

3／7　入舮から「サシアミアルカ」という電報が来たが名前が無い、困っていたら電話が来た、ときどきこんな人もいる。

3／9　このごろは朝早くから毎日のように客がある、商売もこんなに繁盛すればおもしろいものだ、漁網の商売は確かに有望だ、仕入れ先や時期に注意し、小樽や内地の相場、他店の状況を見て商売すると成算はある、相場の激変するのもかえって面白味があるかもしれぬ。

――続く――

当時の世相を偲ぶ【35】

高野名幸作さんの日記から

名医・池田先生の思い出 ②

富山市　高橋　藤蔵
（元・稲倉石鉱業所勤務）

『せたかむい』四月号に、橘さんがしたためた「わが闘病日記」の中の、僅か数行の活字が私に夢を膨らませ、三十数年前の『池田晃治先生』を求めた小さな推理は、橘さんからのお便りで、同人であることが確かめられました。

奇縁です。全く奇縁です。

池田先生が稲倉石鉱山の診療所に派遣されたのは、昭和三十八年の春、ひと月にも満たない短かい期間でしたが、私には二つの思い出があります。

わが懐かしの「ハ」が

当時、稲倉石鉱山の診療所には、札幌医大・胸部外科から若手医師が派遣され、池田先生も家族同伴で着任されました。

着任早々、住民の話題になったのがお嬢さんの事でした。

やっとオムツがとれた二・三才でしたから、まだカタ言葉だったお嬢さんが、窓辺で

「フッシュ」

やら

「ヒッシュ」

やらと、訳の分からない言葉を連発していたと言うのです。

私が近寄ってみますと、お嬢さんが金魚を見ながら

「フィッシュ」「フィッシュ」

と言っていたのです。

この事を知った住民は

「今度赴任された先生は、幼児に英語を教えているそうだ。さすが、学のある方は違う」

と話題になったのですが、実はつい最近までアメリカに医学留学をしていたとの事で、そこで育ったお嬢さんが、言わず語らずに英語を口ずさむようになったのだそうです。

以来、池田先生は

「アメリカ先生」

「イングリシュ先生」

と愛称され、気さくな先生とし住民に親しまれ人気を集めたのですが、日を経ずして帰任してしまいました。

長男出産の翌朝発熱

長男が生まれて二日目の事。何故か発熱し、真っ赤な顔でフウフウしながら泣き出したのです。風邪ではと思い、布団を重ねて暖をとり、水枕で頭を冷やしたのですが熱は一向に下がらず、池田先生に来診をお願いしました。

聴診器を胸に当てた先生は即座にこう言いました。

「心配ありません。掛布団を取りタオル一枚にしなさい」

大事を取り過ぎて厚着をさせたのが原因だったのです。

「人間には病気と闘う抵抗力が備わっているものです。明日になっても治らなかったらお薬をあげましょう」

と言って帰られました。

彼の国では、病気は、まず自分の抵抗力で治し、治らない時に薬の助けを借りるものだと言っておられました。

やんぬるかな、今まで唸っていた赤子は、瞬く間に平温に戻り、元気な泣き声に変わっていきました。

×　×　×

懐かしい思い出を蘇らせた橘さんの投稿に感謝いたします。

ありがとうございました。

釣瓶（つるべ）井戸

竹内コト

昔、町内にはいくつかのつるべ井戸があったようですが、私の知っているのでは、沢江と丸山町にありました。

私は丸山町にあるつるべ井戸を永く使っていました。ちょうど丸山住宅の入る辺りにあり、特に、お茶を入れるとおいしいと評判でした。

古平の大火後、丸山住宅へ居を移してからはずっとお世話になっていました。

当時は、まだ水道が普及していませんでしたから、井戸の周りは賑やかでした。雨が降ると井戸の水かさが増えてきて、それを待っていたかのように、女の人たちがたらいを持って来て洗濯が始まります。そして、そこは女の人たちの話合いの場所に変わります。

丸山町方面の人はほとんどが漁師でしたから、毎度話すことは漁のことばかりです。どこの船が漁があったとか無かったとか、船頭さんのこと、親方のうわさ話などで、井戸端は一気に盛り上がります。

毎年、お盆が近づくと、井戸を使っている人たちで井戸の大掃除をします。井戸の内側をきれいに洗い流し、ロープをつけた桶を下して底にたまったゴミなどをすっかりさらい、それをみんなで引き上げるのです。

あるとき、猫の死がいが上り大騒ぎになったことがありました。猫が水でも飲みに来て落ちたのでしょうか。それを何にも知らずにその水を飲んでいたんですね。思えば今でもぞっとします。

そのうち古平町にも水道がついて、いつの間にかつるべ井戸を使う人もなくなってしまいました。先日、もと住んでいた住宅の付近を通りましたが、つるべ井戸のあった辺りはすっかり舗装されてしまって、場所も分からなくなっていました。

今でも思い出に残るつるべ井戸です。

――終わり――

幸せを与えてくれる アミちゃん

渡辺ハツエ

私は二十日ほど前にこんな夢を見ました。

赤ん坊の顔が見えたのです。とっさに自分の周りを手で探りました。

「居ない！　赤ん坊が居ない！誰が私の赤ん坊を連れて行ったのだろう？」

さぁ大変、夢中で寝床から出ると、亡夫の遺影に、

「赤ん坊が居なくなったの」

と、ひと言。

そして、夢から覚めて平常に戻った私は、以前にもこれと全く同じ夢を見たことを思い出しました。

それは、夢の中での冬の寒い日でした。その時の私は、風呂場やトイレの中まで探し、最後に勝手口の戸を開けて外を見たら、外は街灯と雪明かりでまるで真昼のような明るさでしたが、赤ん坊はいない。

平常に戻った私は、寝床の中で過去を振り返ってみました。私は子供を三人亡くしている。仏様になった子供たちは、私に何か訴えたいことがあるのだろうか。私は、仏様になった子供たちの霊は決して粗末にしてはいないのに、とても悲しくなってしまいました。

今回の夢を見てから二、三日後のこと、寝室の棚を整理しようと思い、袋の中を見てびっくりしました。

（次ページへ）

平安の稚

平安神宮と時代祭

室谷忠雄

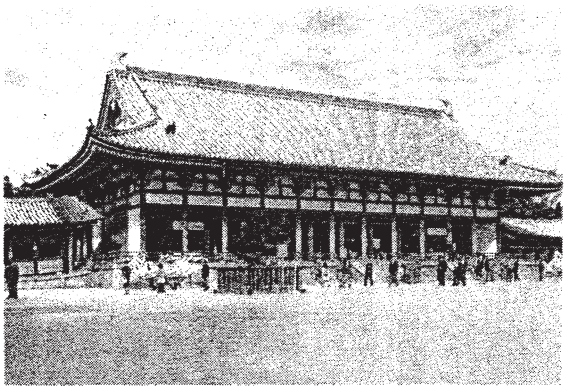
平安神宮の時代祭をテレビで見て、参詣したときのあの壮麗な社殿を思い浮かべ、平安神宮について書いてみました。

この平安神宮というのは、現在の京都に都を移して一一〇〇年を記念して、明治二八年（一八九五）、京都市民の機運が盛り上がり、有志や市民募金など京都市民の総意によって創建されました。

祭神は遷都したときの初代である桓武天皇で、東京に遷都したときの最後の孝明天皇も後に祀られました。

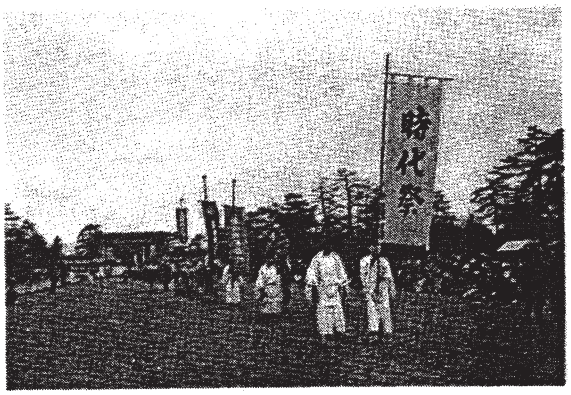
京都観光の名所でもあり、修学旅行のコースにもなっていますので、多くの方もよく知っていることでしょう。

平安時代を懐古し、大極殿や応天門などを中心に当時の建物を復元するため、原形の約〇・六倍の大きさで造営されているということです。ご存知の碧瓦（あおがわら）葺き、朱塗柱で、左には蒼龍楼、右には白虎楼、正面には応天門があり、中国様式を模した絢爛な建築物が出現したのです。



また、京都三大祭というのが有名ですが、その一つに数えられているのが平安神宮の時代祭です。平安神宮よりも、一般にはこの時代祭の方がよく知られているようです。一〇月二二日がお祭りの日ですが、この夜に行われる鞍馬の火祭りと共に、京都のまちは大変な賑いになります。

行列には二千人が参加し、その長さは四キロほどにもなる大変雅やかで豪華なものです。お供をするのは各時代の人々に扮装した京都市民で、都人としての京都市民の誇りを、後世に伝える祭りと言えるでしょう。



（前ページより）可愛いい人形が入っていたのです。背が三十センチくらい、金髪で丸く大きな黒い瞳、優しい口元から、今にも話しかけてくるような錯覚さえ感じました。

思えばこの人形は、孫娘が三歳のときに親戚から頂いたもので、孫はこの人形をとても可愛がって楽しく遊んでいました。『アミちゃん』という名前が付けられていましたが、孫も高校生になり、その後、ずうっと袋の中に入れられていたのです。アミちゃんは袋から出してもらいたくて、きっと私に夢で助けを求めたのだと思いました。

永い間ご苦労さん。ご免ね。アミちゃん、今は私と大の仲良し。私はアミちゃんから幸をもらいました。毎日、二人で楽しくおしゃべりをしています。

断章小説【ふるさと遥か】　第16編

モロトフのパンかご

吉川義雄

サァーと、秋雨のような音をたてて落下してくる小型爆弾は始末の悪い相手であった。

モロトフのパンかごとか呼ばれ、最初はソ連で開発されたらしいが、人畜殺傷を目的とするその爆弾が、早くも米軍機から投下され始めていた。

一個の大きさは直径15センチ、長さは30センチ程で、爆弾が垂直に落下するように20センチ程の羽根がついている。こんな小さな爆弾でも、広い範囲に数千個も雨のように降ってくるとなると下は地獄である。

地上の人畜を殺傷するために造られたこの爆弾は、2メートル程の支柱の周りに四段程この爆弾をびっしり巻きつけ、回転しながら遠心力で分離させ、はじかれた爆弾が広範囲にばらまかれて、地上の人畜に被害を与えるものであった。

爆撃機であれば一機でも相当数のモロトフを積めるから、落下音のやさしさに似ず、下は豪雨のような爆弾に見舞われる。不完全でも近くに防空壕さえあれば防げるが、飛沫のように四方から飛んで来るカミソリの刃のような鉄片は、よほど都合のよい遮蔽物でも無い限り防ぎようがなかった。

どれ程多くの人畜が倒れて、大地に尊い血を吸わせたことか。戦争の罪科は、止まることなく大量のの生命を奪うことに熱中する。その究極に人類はついに原子爆弾という悪魔の兵器を造り、宇宙のオアシス地球さえ一瞬に消滅させるだけの量を、今、この時に所有していて、互いに威嚇し合っているのだ。何という愚かしいことか。戦争と戦争の谷間を平和と呼ぶマヤカシを止め、地球を破滅させるだけの破壊のエネルギーを、万年の平和建設の方向に転換させる英知を結集できないものだろうか。

もはや、一国家や一民族の利益の追求にうつつを抜かしている程、のどかで広々とした地球ではないのだ。一瞬のうちに情報は駆けめぐり、政治も経済も、文化も教育も、科学も宗教さえ地球民族という立場をとらない限り、いつか必ず淘汰されるか衰微は必然であろう。

防空壕のすき間から飛び込んできた弾片がキーンという金属音をたて、跳弾の一つが仲間の誰かに当たったらしい。

「やられたッ」と、悲痛な声を出して兵がのけぞった。

「どこだッ」と、身体を調べると、ズボンを切り裂かれ尻に一筋の赤い線ができただけ。心から笑い合えたのは後々のこと。

爆撃が終わったのを待ちかねたように、山田軍曹が壕を跳び出した。

飛行場には連日の空爆で破壊された個所を修復をするために、多くの島民が狩り出されて来ていたし、敵機の爆音を聞きつけて、

「ホイリンキ、ラエラ（敵機が来た）、ラエラッ」と、叫び合いながら飛行場から離れようとして、必死で走り回っていたことも彼は見ていた。

兵たちは、島民が哀願しても自分たちの入る防空壕に入れることはない。生死の境にいても人間はエゴをむき出しにするものらしい。彼は一度、隊内にある最も堅牢な造りの弾薬庫に走り回る島民を全部導き入れ、泣いて感謝されたかわりに、危うく軍法会議にまわされそうになったことがある。

飛行場の外れで、農作業に使われていた水牛が四肢を空にばたつかせ、田の中は血の海であった。農夫がひとり悲しい顔に涙をつたわらせ、間もなく死んでゆく水牛を、肩を震わせながら声もなく見守り続けていた。

（この稿　終わり）

断章小説【ふるさと遥か】　第17編

チコと兵隊

吉川義雄

小猿をポケットに入れて生還して来たその男は、無口で静かな兵であった。

南方激戦の幾つかの拠点から生き残りの兵員を収容して、イ号潜水艦は懸命に輸送していた。この基地にも、それら敗残の兵たちが来始めていた。ときには昔の仲間もその中にいて、互いに歓声をあげて抱き合った。

言葉を忘れたのかと思う程、一日中黙りこくっているその兵は、支給された軍服に階級を示す何も無いから、基地の下士官ですら警戒して言葉を改めた。

彼の軍服のポケットには二十センチにも満たない子猿が住んでいて、臆病そうに頭だけ出して、他の者が近づくともぐり込んですぐに隠れた。

こんな子猿が棲息する地域といえば、南方のジャングル地帯であり、次々に全滅の憂き目にあっていた戦場である。

彼がどんな経過をたどって、ここまで生きて帰って来たかは知らないが、想像を絶する苦痛を味わってきたことだけは間違いあるまい。そんな中でも、彼がこの子猿を離さずここまで連れて来た愛情と強靭な反骨の意志を感じ、兵たちはみんな彼と子猿に好意を寄せ合った。

所属が決まらないから、終日、兵舎の壁に寄り、悲しげな目を窓外に向けている主人にかわり、兵たちは子猿の好みそうな餌を集めてきた。子猿の方も次第に兵たちを覚え、素直にバナナやマンゴーを受け取って喰べ始めた。

このころになると主人の彼も、「ありがとう。チコよかったなァ」と、心を開いてきた。

子猿の名がチコとわかったときから、兵たちはその名を連発して主人以上に可愛がった。チコもときどき主人のポケットから出て、顔なじみの兵の傍まで来るが、見知らぬ者が手をのべると飛鳥の早さで主人のポケットに戻って隠れた。

密林をなぎ倒すような艦砲の炸裂と、追い討ちをかけるナパーム爆弾の紅蓮の炎で、さっきまでの青嵐の森も村落も、基地などは跡形もなく消えた。

百を数えた隊員も、生存者は、彼、杉山兵曹と十人にも満たない兵だけであった。燃えるジャングルの中で、無我夢中でポケットに救いあげたのがチコであった。以来、彼等は分身のように離れることはなかった。

部下を全部失った彼の心の痛手も大きかった。チコだけが彼の友であり、チコもまた、彼から離れて行く気配はみじんもなかった。互いに何を食べるのか分からないから、チコがカタツムリを彼にすすめたり、彼がチコに川蟹をやってチコがおこったりした。

沖合いの潜水艦に収容されるとき、数百メートル泳がなければならなかった。チコは彼の頭の上で、不安そうにキッキッと幾度もないたが離れることはなかった。

艦上の下士官が、「貴様ッ猿を連れて来てッ」と咎めたが、「黙れッ」と、彼のえぐるような一喝にあって、以後、誰も文句を言う者はいなかった。

杉山のふるさとは、冬が来ればキーと悲しげなキシむ音を連れて来る、オホーツクの漁村であり、チコの生まれ育った密林は炎熱のむせかえる南国である。互いに故郷は遠かった。

悲しみを知り、悲しみを分かち合った者であれば、この先も離れることはないだろう。

戦争とは、如何なる理由をつけようとも、一切の幸福を剥離して止まない最大の罪悪である。その愚行に背を向けるようにして、チコと兵は寡黙であった。

（この稿終わり）

短歌　古平町岬短歌会十月詠草

ブロックの塀の隙間に咲きしむらさきの桔梗小さし夏の名残りと
榊　佳代

汐見町に貫通されしトンネル口が見ゆ海際の事故より取りかかりしと
池田　テル

笠持ちて踊りを復習ふ夜をひるを恋するをのこを表現せんと
鈴木　時子

去年事故のありたる舗道の傷のあと汚れ増したり避けて歩みぬ
東　美知

菩提寺の裏手の墓にひとり来て亡き母と聴く諸鳥の声
竹内　コト

古里に集ひ久びさに旧姓で呼びあふも楽し同期の会は
堀　典子

さびしければひとり厨にたち来り炊ぐ匂ひのなかに安らぐ
山口　スエ

小雨降る大根畑の群雀わが足音に一斉に発つ
奥山　きよみ

俳句　古平ホトトギス会

古平の街並飾るななかまど　斉藤　波留
大綿の来ぬにちらほら降りにけり　山口　悦子
なにげなく写絵を手に月今宵　越野　敏雄
衣被てふ聞き馴れぬもの貰う　大和田　絵伊
らんかんに人車動かぬ鮭遡上　福井　幸平
栗の実にリスの歯形のありにけり　関口　勝志
十月の島の日和の定まらず　よしざき　り
大輪の天竺牡丹居間に咲き　仲谷　比呂古
秋の雲一陣の風流しけり　越野　清治
秋休暇夫と二人の湯宿かな　室谷　弘子

川柳

病室の一人一人の人生譜　石井　愛子
黄昏時静かなる一とき虫の音に
小樽にて街を闊歩した娘の夫婦　渡辺　ハツエ
親の背を見ながら子等の真実一路
カタツムリ己の住み家背負い歩き